

## 人間性を磨き合う学級Ⅱ

### Classroom Management Based on Human Education

赤坂雅裕\*

Masahiro AKASAKA

## ○ はじめに

以下の4つの要点を押さえた実践を行っていれば、「人間性を磨き合う学級」は自ずとできていく。

- ①学級のなかに「支持的風土」をつくる。
- ②学級に「規律」を確立する。
- ③道徳授業で、一人ひとりが「あこがれ」を見だし、それを磨き合っていく。
- ④学級活動で、「できる自分」を実感していく。

ただし、「人間性を磨き合う学級」を醸成していくうえで、基底となるものが4つある。「人間性を磨き合う学級」をつくるための4つの心がけである。

その一つひとつについて概説していく。

## 1, 子どもをダメな子扱いしない

人間性を磨き合う学級をつくるための心がけの第1は、「どの子をも決してダメな子扱いしない」ということである。

## (1) 子どものほんとうの心

幸 せ

ネコになりたい。  
学校に行かなくても何も言われなくて、

一日中ひなたぼっこしてねてられる。  
ネコになりたい。

けど、ネコはこう思っていると思う。  
自分の意見をはっきり言えるコトバがしゃべりたい。  
人間のようにになりたい。  
勉強もしてみたい。  
学校に行きたい。  
人間のように・・・。

今、私たちは人間。  
人間に生まれたことを最高の幸せと思い、  
人間としての人生をしっかりと生きてみたい。  
それが、「幸せ」です。

この作者は、私が中学校教師をしていた時に会った中学2年生の生徒である。

この生徒は、当時いくつか悩むことがあり、やけをおこし、その後一週間ほど家にじっとして、ネコと暮らしていた。

家庭訪問を毎日していたが、彼女の心が少し落ち着いたなと感じた頃、「もしよければ、詩でも書いてみないか」と言ってノートを渡していたのである。そのノートにこの詩は書かれていた。

私は、この中学2年の生徒から、教師としての「眼」「心」を開眼させてもらった。この生徒

\*文教大学国際学部准教授

によって、この詩によって、「真実」に気づかせていただいた。

「最近の子は無気力・無感動だ。いい加減で責任感のかけらもない・・・」

そういうことがあてはまることもあるけれども、それらは表面的なことで、実は、本当のギリギリのところは違うのだ、と。

本当はどの子も学びたいのだ、と。

人間として成長し、幸せになりたいのだ、と。

その後、多くの子どもたちとの出会いによって、私は、

- 「人間にくずはない」（金沢嘉市）
- 「千の子どもに千の花が咲く」（吉田六太郎）
- 「心のスイッチさえ入れれば、どの子も必ず光り出す」（東井義雄）

という子ども（人間）観を、確たるものとして心に刻むことができた。

現在の子どもたちや若者は、

- ・自分を大切にできない
- ・相手の痛みが理解できない
- ・自己表現力が乏しい
- ・コミュニケーション能力が低い
- ・自暴自棄である
- ・正しく躰られていない
- ・自己中心的である
- ・感情のコントロールができない

などと言われている。

確かにそういう面もあるだろうが、それらは全て表面的なことで、ほんとうのギリギリのところでは、誰もが自分を好きになりたい、人の気持ちがわかる優しい人間になりたい、人の役に立つ人間になりたいと思っている。

「最近の若者は、世の中を冷めた目で見、ただ

自分が楽であつたらいい。事なかれ主義で生きている」等と批評する方がいるが、私は、それらは浅い見方であると思う。

## （2）重要他者の願うような人になる

子どもは（特に幼い時期には）、親や教師が自分をどう見ているかということで自己認識を図っていく。

親や教師が、ダメな子扱えば、「自分はダメな子だ」と思いこんでしまう。

故に、教師であるあなたは、「今、私の学級にいるこの子は、自分の目に見えているよりも、もっともっと多くの可能性を持った子なんだ。将来性豊かな素晴らしい子なんだ。決してダメな子なんかじゃない」ということを固く信じて子どもたちに接してほしい。

どうか、子どもの「よさ」を意識的にたくさんたくさん見いだしていただきたい。

そして、そのよさを認め、ほめてあげてほしい。

子どもは重要他者（親や教師）の願うような人に近づいていく。

あなたが「ほめてあげる方向」にグングン伸びる。

そして、おとなが予想しなかったほどの力を発揮する。

そういう事実がいくつもある。

これからの子どもたちは100年間生きる。

その最初に、ダメな子のイメージを植え付けられ、自己否定感を持たせられると、その子は何十年もの間、長く辛い人生を生きねばならないことになる。

たとえ問題を起こした時でも、短く要点を押しさえて叱った後、必ず、「君は本当はいい子なんだ。素晴らしい子なんだ。将来は、きっと立派な人になる」と言ってあげてほしい。

「おまえはどうしようもない子だ」などと断言

して、切り捨てるようなことだけはしないでいただきたい。

### (3) 「否定」は「否定」を生む

子どもは様々な家庭事情を背負って生きている。

悪いことをする子も悪いことをしたくてしているのではない。

ほんとうの子どもは、そのもう一つ向こうにいる。

そもそも、「非行少年」と決めつけることのできる資格のある人間が、この世にいるのだろうか。

人間はみんな、与えられる条件によっては、何をしでかすかわからない恐ろしいものを持っている。

そういう恐ろしい問題を起こす可能性が、私にもあなたにもある。

大切なことは、「非行少年」なのだ決めつけ、彼らを力で圧していくのではなく、「心のスイッチを入れてくれる先生に出会えていない不幸少年」なのだとの毒に思い、同行教育を行っていくことである。

25年間の教員生活を通してわからせてもらったことは、「千の子どもに千の花」「人間にくずはない」「どの子ども心のスイッチが入れば、必ず光りだす」ということである。

東井義雄先生が言われるように、「どの子ども子どもは星。みんなそれぞれがそれぞれの光をいただいてまばたきしている。ぼくの光を見てくださいとまばたきしている。私の光も見てくださいとまばたきしている。光を見てやろう。まばたきに答えてやろう。光を見てもえないと子どもの星は光を消す。まばたきをやめる。やんちゃ者からはやんちゃ者の光、おとなしい子からはおとなしい子の光、男の子からは男の子の光、女の子からは女の子の光り、天いっぱい子どもの星を輝かせよう」

という姿勢が教師に求められる。

自分からつまらない子になりたい子なんて、一人もいない。

子どもというのは、「身の程知らずに伸びたい人」。一步でも前進したくてたまらない人。希望に燃え、力をつけたくて、ウズウズしているかたまりが子ども。

子どもが問題行動を起こすのは、何か、そうせずにおれない「理由」を必ず背負っているということである。

その、子どもの背負っている「理由」を知らないで、表面上の問題行動だけを責めるというのは、病気のもとを確かめようとせずに病状に振り回されているようなものである。

病根をつかまないうで病気を治すことはできない。

怒鳴りちらしたり、ガラスを壊したりする暴力行為のそのもうひとつ向こうにある「よい生徒になりたい」というその生徒の願いを汲んであげること。

クラスの生徒から嫌われてもかまわない。

しかし、嫌われても、こちらは生徒を嫌わない。それが教師の仕事である。

暴言を吐き、暴力をふるう子でも、好きになるよう努力する。それが教師の仕事である。

嫌いだから激しく叱る、嫌いだから、「お前は どうしようもないダメな子だ」などと言って冷たく辛く当たるなど、言語道断。それでは教師失格である。

教師の道は、決して甘くはない。

「うぜえ、死ね！」と言い、石を投げてくるような子まで愛さなければならぬのであるから、その道はあまりにも過酷である。

しかし、とにかく、「どの子ども心のスイッチさえ入れば必ず光りだす」のだという、子どもへの「信」だけは大事に生き抜いていくべきである。

子どもに対する肯定的な見方が、子どもを育てる。

「おまえはダメな子だ」という教師からの「否定」は、「この先生はオレのことをちょっともわかってくれない。つまらん先生や」という生徒からの「否定」を生む。

「否定」は「否定」を生み、「肯定」は「肯定」を生む。

「おまえはダメな子なんかじゃない。必ず立派な人間になる」

悩み、もがいている子に、そう強く、言い切っただけでいい。

その「肯定」から、道が切り拓かれていく。

## 2. 子どもに学ぶ

人間性を磨き合う学級をつくるための第2の心がけは、「教師が、子どもに学ぶ姿勢を持つ」ということである。

### (1) 先生は目に見えるものしか見えていない

私は、新任の頃、暴力教師であった。

青春ドラマの教師のように、生徒と共に汗をかき、涙し、喜び、笑い、抱き合う、そんな教師になることを夢見ていたのであるが、実際に教壇に立ってやったことは、自分のクラスから問題が出ないようにと、プラスチックバットをもって生徒を脅すこと。

先輩教師や同僚からのプレッシャーに負け、大学時代にあこがれた「自分の理想とする教育」をすっかり忘れていたのである。

とにかく、自分がちゃんとしなければいけない。

しっかり指導して、校則違反や問題が自分のクラスから起きないようにしなければならない。

〇〇コンクールでも低い点をとって、他のクラスから引き離されてはいけない。

点が低いと、自分に教師としての指導力がないということになってしまう。

そう思い、必死だった。

自分では正しいことをしている優秀な熱血新任教師のつもりであった。

「どうして遅刻したんだ」バン！

「違反服はイカンだろ！」バン！

「掃除をまじめにやらんか！」バン！

「テスト勉強は真剣にやれ！」バン！

朝の会から帰りの会まで、鬼の顔で大声で怒鳴ってばかりであった。

生徒には、とてつもなく怖い先生に見えたであろう。

それで、私が「右向け！」というと、クラスの全員が、一斉にバシッと右向く、そんな学級になってしまった。

体育会も合唱コンクールも優勝。美化コンクールでも何でも1位。成績も上位。

「へへい、どんなもんだい。オレは1年目で、統率のとれた学級をつくったぜ」

先輩の先生方に対しても有頂天になっていた。

そんな私に、ある日、おとなしい女の子が小さな声で、

「赤坂先生は、スカートの長さとか賞状とか目に見えるものしか見えていない。小学校の時の女の先生は、私たちが何も言わなくても、私たちの心をみーんなわかってくれていました」

とポツリ。

その小さな声は、有頂天で横柄な私の胸にグサリと突き刺さる。

「先生にとって最大の先生は子どもである」

何かの本で読んだ一文が、頭のなかにパッと鮮明に広がった。

私は、その日からバットを捨て、生徒の「心」に注目した教育を追求しだすことになる。

### (2) 「書かせたもの」から聴く

中学生の本心をつかむことは難しい。

先生の指導について疑問や不満があっても、我慢できる限界まで何も言わない、追い詰められるまで、ギリギリのところまで何も言わないという、そういう生徒は少ない。

教師は、常に、教師の方から、「先生がやっていることは間違っていないだろうか？行きすぎていないだろうか？」と生徒に聴いていく姿勢が大切であると思う。

私たちの顔には、口は一つであるのに耳が二つある。

この事実は、「言うことよりも聴くことが大事。よくよく、聞いた上にも聞いてやりなさい。そのことが大切ですよ」ということを教えて下さっているのではないかと思う。

「聞いてやる」ということは、「わかってやる」ということにつながる。

中学生は反発心が強いが、一方で、自分をわかってくれる人のためなら、どんな苦勞もいとわないという心を持っている。

口よりも耳の方を大切にしはじめると、中学生の方から、距離を縮め、溝を埋めて迫ってきてくれるということがある。

もちろん直接聞いても、中学生はなかなか答えてくれない。

教師が聞けば聞くほど、口を閉ざすであろう。

しかし、文章では比較的、素直な心を見せてくれる。

私は、生徒が道德の授業で書いてくれた文章などから、「生徒のほんとうの心」や「私の実践のいきすぎ」などを聴いていったように思う。

そして、表面に見えているものにとらわれてしまわないで、そのもうひとつ向こうにほんとうのその子がいるということをわかるようになっていった。

生徒たちが書いた文章を見ることを通して、中学生を見る目を徐々に変革されていったように思う。

おー  
おー  
に やんて  
し んぼう強いんだ  
こ うい  
う ふうに生きていきたい  
ぜ。  
い きていけるかな？

これは、幼少の頃から心臓の手術を繰り返して受けてきた大西くんが、「自分の名前から」という道德の授業でつくりあげた詩である。

大西君はおとなしく、私が語りかけても、自分から話すことはあまりなく、いつもコックリ「うん」と頷く、そんな優しい子であった。

しかし、優しいだけではなかった。

入院している時に、周りにいる患者さんを観察していたのである。

そして、術後の辛さに静かに耐える周りの患者さんからしっかり学び、「自分も辛抱強く生きていきたい」と思っていたのである。

問近に迫った、次の手術への不安も持ち合わせているが、困難に負けず強く生きたいと願っている。

まさか、自分がこんなふうになるとは思っていなかった。

これは、タバコを常習し、友だちとのケンカや器物破損を繰り返していた男子生徒が、道德のプリントの端に殴り書きした言葉である。

彼は、彼自身でも、自分がキレル人間になるとは思っていなかったようである。

教師に暴言を吐き、悪態ばかりついているが、ほんとうは、「どうしてこんな自分になったんだろう」と悔やんでいる。

今の荒れる自分を決していいとは思っていない。

このように、私は、生徒が書いてくれた文章から、「生徒のほんとうの心や願い」を教えるも

らった。

また、「文章から聴く」という以外に、ときおり、放課後、誰もいない教室の生徒の座席に座り、「声なき声を聴く」ということも行った。

放課後生徒の座席にかけてみると、教壇に立っている限り見えないものがいろいろ見えてくる。生徒の声が聴こえてくる。

「先生、そんなところに板書しても、この席からは見えません。ちゃんと板書計画たてているんですか？」

「青のチョークは、光ってまったく見えません」

「(机の落書きから)先生の授業はつまらん。私の心に全然響いていません。私は黙って耐えているだけです」

生徒の座席に座ってみると、教壇からは見えない世界が見え、生徒の本心を聴くことができた。

「聴く」ということは、相手から「学ぶ」ということにつながる。

東井義雄先生をはじめ、日本教育史に名が残る先生は、すべて「子どもに学ぶ」姿勢を大切に続けておられた。

私は、私の体験から、道徳の授業などの中で生活やその思いを書かせ「文章から聴く」ということと、放課後、誰もいない教室の生徒の座席に座り、「声なき声を聴く」ということを、先生に強くお勧めする。

また、あなたの学級の生徒からだけでなく、もっと広く、子どもたちの書いたものから学ぶように努めてほしいとも思う。

### (3) 作家の目で

あまりに、教師が子どもに密着しすぎると、見えるものが見えなくなる。

指導すべきポイントとその必要のないものが混同されたり、指導の仕方に狂いが生じたりする。

子どもを見ている自分、子どもを叱っている自分が、今、どういう態度でいるかを見る、もう一つの目が教師に必要となってくる。

その目がないと、「子どもを傷つけるだけの指導」になってしまう危険がある。

教師には、「子どもを見る目」と「それを見ている自分を見るもう一つの目」を持つ必要がある。

そのために、子どもから聴く。子どもに学ぶ。

問題が起こったとき、たとえ、それがいけないことであったとしても、子どもには子どもなりの理屈があり、言い分がある。

一呼吸おいて見てみると、それが見えてくる。

子どもを理解するには、この一呼吸がものを言う。

子どもが見えた時、その指導は、ぐーんと深まる。

子どもに即した指導が可能となってくる。

現象の観察だけでは、教育は始まらない。

なぜそのような行動や現象を示したのかという「解釈」、その解釈に基づいて何らかの指導を加えるべきかどうかの「診断」、いかなる方向性をとり、いかなる手立てをとるのかという「処遇」、そういった一連の手続きがあって、初めて、ほんとうの生徒指導になる。

中学校教師は、子どもの真実をみきわめるということよりも、こちらの感情が先走ってしまう傾向が強い。

あまりにも問題が多いので、ゆとりをもって、いろいろの角度から考え直してみることができにくい。

「熱心」なのはいいが、現象面だけを見て、思わずカッとなってしまい、子どもの真実を見誤らせては何にもならない。

「教師」というものは、ほんとうの子どもが見えなくて失敗ばかりしているのだと思う。私も、中学教師の時、どれだけ失敗し、子どもを傷つ

け、泣かせていたことか。考えるとゾッとする。

教師は、どうしても、子どもの行動を「善悪」「正邪」だけで見えてしまい、現象面にとらわれてしまいがちである。

それに対し、作家の人たちは、現象面を手がかりに、そのもうひとつ向こうにあるものを見ようとして目を深め、「真実」を描きだす。

私は、永畑道子さんや曾野綾子さんの作品から、「子ども」や「人間」というものの真実を学ばせていただいた。

先生方、作家の目に学びましょう。

作家の目で中学生の行動を見ると、「彼の強がり」は彼の弱さの表現なのか。彼の猛烈な反抗は彼のたとえようのない寂しさの表現なのか」ということなどがわかるようになってくる。

すると、その子がいくら強がっても、反抗しても、むしろそのことで、彼がカワイイとさえ思えるようになってくる。

作家の目で中学生の「行動」を見、解釈して、その中学生の「ほんとうの心」を学ぶこと。そして、それに基づいて日々の実践を積み上げていくこと、そのことが私たち教師にとって大事なことなのである。

### 3、大いにほめる

人間性を磨き合う学級をつくるための第3の心がけは、教師が、子どもの「よさ」や「向上的変容」を見だし、大いにほめるということである。

#### (1) 叱ることでは、子どもの向上的変容は生まれにくい

教師は、何かを子どもに注意すると、子どもはそれを聞いて、すぐ教師の願うとおりに変わってくれるものだと思込みがちである。

それで、直してほしいことを次から次に注意

する。

悪意はない。熱心なのである。一生懸命な先生ほど、細かくガタガタと注意をしている。

しかし、人間というものは、そう簡単に変身できるものではない。

それは、おとなである私たち自身の欠点や問題点が、自分で余程努力したつもりでも、心を新しくして取り組んでみてもなかなか改めることができない、ということを考えてみれば容易にわかる。

自分でも自分をどうすることもできない者が、(教師ということで)子どもには、安易にいろいろな要求をつきつけている。そして、「なんべん言えばわかるの?」と、また子どもを叱りつける。

こういうことを私たちは行っていることが多い。

異性への関心が強くなりすぎ、問題行動を頻繁に起こす中学2年生の女子生徒がいた。

その生徒に「このままじゃいけない」と語りかけ、「こういうことはしないように!」と具体的に注意し、叱った。

納得してもらったつもりであったが、少しも良くならない。

私は、親の協力を得なければと思い、保護者に学校に来てもらい、お願いした。

その後、その子は3日ほど、自分を改善しようと努力していた。

きっと、親からも厳しく注意されたのであろう。

しかし、4日目には、もうダメであった。

元のグループに戻るだけでなく、私を嫌うようになり、私を避け、私を感情的に非難し、ますます私が心配する方向に突き進んでいった。

私は、真剣であった。その子がまちがった道に進まないよう必死であった。

だが、その注意して叱る指導は、彼女にとってはまったく逆効果であったのだ。

次のような経験もある。

先日、20年ぶりの中学卒業生の同窓会があった。もう30代半ばになっている教え子たち。私

が、青年教師の頃教えた子たちである。

楽しくお酒を酌み交わし、なつかしい話して盛り上がったその同窓会の帰り際、

「先生からは、あたし、いつも怒られていました」と、目をとがらせて、突然、激しい口調で言いきた教え子がいた。

周りの教え子たちは、ギョッとし、場が一瞬、静まりかえった。

その教え子の目は、私への憎しみの炎で燃えていた。

中学を卒業して20年以上も経つのに、私のことを憎み、恨んでいる。

私は、その子が問題行動を起こさないようにと一生懸命指導したのである。

それで、随分叱ったのであろう。(当時の私としては、正しいと思ってとった指導)

しかし、その一生懸命さは、彼女にまったく伝わっていなかった。

私のあの当時の指導は、熱意はあったのであろうが、とにかく、あの子にとってはまちがっていた、恨みにさえ思う指導だった、ということ強烈に突きつけられた。

「申し訳ない指導をしてしまった。ほんとうにゴメンね」

私は、深く頭を垂れるしかなす術がなかった。

悲しいけれど、私は教師として、この事実から目をそらしてはいけないと思う。

そして、現在活躍されている現場の先生方に、私のような失敗はしてほしくないと願う。

私だけでなく、私たち教師の中には、前後の見境もなく、ちょっとした一度のできごとで生徒を叱りやすいという人が多いのではないだろうか。

私は、現在でも、よく中学生の部活の試合を見に行く。

ほとんどの監督の先生は怒鳴ってばかり。生徒はいいプレイをたくさんしているのに叱ってばかり。

みなさん熱血監督なのであろうが、本に書け

ないような言葉をたくさん使って生徒を叱り飛ばす光景は、見ていて決していいものではない。

教師は、片々たることで、子どもを責めやすい。

責めても責めなくても結果は同じといったことをも責めやすい。

そういうことを私たち教師は深く反省しなければいけないのだと思う。

確か、大村はま先生のご本に載っていたと思うが、大村先生は、自分の気分が良くないときは、小指にテープを貼って、

「今日は自分の機嫌が良くないのだから、こういう時は決して生徒を叱らないように！」と自分で自分を戒めていた、ということを出す。

もちろん、叱ることが必要な場面もあるが、「叱る」ということに関しては、私たち教師は、よくよく注意して行わなければならない。

## (2) 9割の人は、ほめられて育つ

9割の人は、ほめられて育つ。

叱られて、「なにくそ！」と思って育つ子は、そんなにいない。

最近の脳科学によると、ほめられた時に分泌される脳内伝達物質が、脳の働きを高めるという研究もある。

人間関係改善だけでなく、生産性向上のためにも、ほめるのが効果的である。

なにもわざわざ脳科学を出さなくても、歴史的にも実証されていることでもある。

にもかかわらず、日本の組織のなかでは、「ほめるコミュニケーション」があまりにも少なすぎるように思う。

学校でも企業でも、スポーツクラブでも、少なすぎる。

「ああ、あれでは人が離れていく」



ある職場で、管理職の方が、中間管理職の方を見て、ボソリと言われた言葉。

その方は、部下への不満が多く、しかめっ面で叱責ばかりしていた。

確かに、管理職が予想されたとおり、その方からは、部下がどんどん去っていった。最後まで近くにいた人も、ほんとうは心はつながっていなかった。

するとその中間管理職は、ますますカッカし、「最近の若者は厳しさを嫌がり、優しい方へ流れていく。その“優しさ”は“易しさ”につながる。そちらに流れては墮落するんだ」と怒鳴り、叱責を強化していた。

しかし、その結果、とうとう組織の中で浮き上がってしまった。

自分が怒鳴ってばかりで、部下の叱責ばかりしているから、人が自分から離れていっていることに全く気づかない。哀れであった。

企業だけでなく、学校でも、ほめることによって子どもを動かそうとしている教師は案外少ない。

ほめることによって子どもを動かせる教師は、技量の高い教師である。

よく観察すると、力のない教師ほど、叱ることによって動かそうとし、子どもの名前を呼び捨てにしている。力量の乏しい教師ほど、いつも大声でガガガ怒鳴り、あまり子どもをほめていない。

力のある先生は、いつも穏やかで笑顔で、落ち着いて気品があり、子どもをほめている。

力のある先生は、「日常的な活動」のような場合、頑張っている子やグループをほめ続けることで、学級全体を動かしていく。

教師がほめることによって「まじめに活動しよう」とする子やグループが増えていく。それだけではなく、教師が「新しく工夫したところ」などもほめるので、学級に「創意工夫」が次々に生まれてくるようになる。

ほめるということは、子どもを元気にさせ、

活発にさせるだけでなく、「創意工夫」も促していく。

もちろん、叱ることによって、活動を促すこともできる。

しかし、それは、子どもの本心からのものではない。子どもの心のひだの中まで、先生の優しさとか熱意とかが伝わらなければ、子どもは本当には動かない。

また、叱ることによって「創意工夫」が生まれることはない。

ほめることは、活動を促すだけでなく「創意工夫」も次々と生み出す。

よって、ほめ上手な先生のクラスでは、次々と面白く、すばらしい活動が展開されていく。

文化祭などでの発表の時、その力量差は明らかになる。

学級では、「助け合って、すごいことをしたとき」「人に言われてではなく、自分から進んでやったとき」「試合では負けても、全力でプレーしたとき」など、大いにほめてあげよう。

「ほめる教師」か「怒鳴る教師」かは、教育観がまったく違うのであり、人間としての器の大きさに違いがある。

自分に力がないと、人間力がないと、自信がないと、子どもを認め、ほめることができない。そのゆとりがない。

ほめると子どもは、ニコリいい表情をする。

ほめると子どもは、グングン伸びていく。

その子どもの成長を見て、教師も幸せな気持ちになり、その嬉しそうな先生を見て、子どもは喜び、ますます伸びていく。

教師が子どもをほめることから、すべては好転していく。

それなのに、「うちのクラスの子は、ガミガミうるさく言わないと何もやらない」と嘆く教師がいる。

はたして、そうでしょうか。

ガミガミうるさく言いすぎるから、余計何もなくなるのではないか。

子どもにはやる気はある。本来、動きたくてしかたがないのである。

教師が子どもの心をつかみ、動かすことができているだけなのではないか。

子どもを動かすうえで、最も大切な「ほめる」ということをしていないからではないか。

子どものどれほど小さな努力でも見逃さずに、ほめること。笑顔で、心から、喜んでほめること。そのことが子どもを動かす。

「努力」を認められ、ほめられるときは、子どもだけでなく、人は必ず自ら動きだすものなのである。

なんでも評価をするときは、まず、よいところを見てあげること。

そして、よいところをほめてやること。

その後で、課題を言ってあげればいい。

「ここを～すれば、もっとよくなるよ」とアドバイスをあげればいい。

悪いところを叱るのではなく、自分の良いところを見つけてくれ、適切な助言をくれる教師の言うことなら、子どもは心から慕う。

ほめるのは、基本的にはその場でほめるのがいい。

あまり難しく考えなくていい。うまくほめようなんて思わなくていい。

まずは、あなたが、心から嬉しく思ったことを、最高の笑顔で、素直にストレートに、その子に言ってあげるといい。

そういう担任のもとでは、必ず学級がパッと明るくなる。子どもたちに笑顔が見れるようになる。そして、子どもたちが動き出し、教室が活き活きしてくる。

それに対し、何をしても、どのようなことがあっても、ほめられることはなく、ただただ叱

られるだけの学校生活を送り続けると、子どもたちは教師が嫌いになり、不登校をする子ども出てくることになる。

教師である私たちは、山本五十六の次の言葉をいつも肝に銘じておかなければならない。

「言って聞かせ、やってみせて、やらせてみて、ほめてやらねば人は動かじ」

### (3) 身につけたい「ほめ言葉」

教師は、ほめ言葉のボキャブラリーを増やしていかなければならない。

ほめ言葉のボキャブラリーが貧困では、子どもたちにより励ましを与えることができないからである。

どんなに子どもたちに対する観察力が鋭くても、的確な「ほめ言葉」がぱっと口をついて出てこなければ、力量のある教師とはいえない。

正しいほめ言葉の原則として、次の4点がある。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①事実を、細かく具体的にほめる</li><li>②相手にあわせてほめる</li><li>③タイミングよくほめる</li><li>④心をこめてほめる</li></ol> |
|---|

まず、人は、漠然とした言葉でほめられるよりも、自分のどの部分がよいかを細かく具体的にほめられた方がうれしいものである。

次に、コミュニケーションは、相手があっちはじめて成り立つものであるから、相手の性格や、置かれている立場・状況に応じたほめ方をすることが大切である。

ほめ上手は、観察上手。

一人ひとりの生徒の持ち味や長所、そして細かい成長を見逃さずにいたい。

3つ目は、生徒にとってほめられてうれしいと感じる時にほめることが大切である。

生徒がよいことをした時、成果を上げた時に、すかさずほめることが、ほめ上手になるためのポイントである。

4点目は、むしろ、飾らない言葉、シンプルな言い回しで、言葉と声に気持ちを載せて心をこめてほめることが重要になる。

原則以外に留意しなければいけないことは、以下の3つである。

○「ほめる」とは、事実に基づき生徒の優れているところを認め、言葉で伝えることを言う。生徒の長所や優れている事実に言及することが、ほめ方の基本である。

それに対し、事実でないことをあたかもたえているかのように言うことを「おだてる」、相手に気に入られるようにふるまうことを「媚びる」という。

特に、「ほめる」と「おだてる」をまちがえないように。

「ほめる」には、生徒の自発性や意欲を引きだし、学級や学校をより良くしていくというポジティブな効果が付随する。

○何をほめていいかわからない時は、「結果」よりも、努力している「プロセス」の段階、日常の姿にこそ、目を向けることが大切である。

○「ありがとう」「お疲れ様」といった感謝の言葉、ねぎらいの言葉は、生徒の存在や働きを承認するメッセージでもあり、生徒の意欲や自発性を引き出すきっかけにもなる。ほめているという感じはあまりないが、ほめ言葉と同じような効果がある。

生徒にたくさん、「ありがとう」「お疲れ様」と言いたいものである。

では、場面別に用いたいほめ言葉を紹介していく。

生徒が一生懸命に取り組んでいる時に使いたいほめ言葉

- ・ いいねー。パワーがあるね。
- ・ なにか「熱い」ものを感じるね。
- ・ 行動力があるね。(特にまだ成果が出ていない生徒に)
- ・ いつも一生懸命だね。(努力を怠らないこと、浮ついていないことに対して)
- ・ 君の集中力はスゴイね!
- ・ きっと、いいことが起こるよ。

生徒の誠実な態度を評価したい時

- ・ 礼儀正しいね。(言われ続けることで、生徒がますます礼儀正しくなる)
- ・ 今の君は世の中に出て、一番大切なことができてよ。
- ・ 君みたいな人は誰からも信用される。
- ・ どんな立場の人に対しても、分け隔てなく、心を開いてコミュニケーションがとれている。素晴らしい!

行動の優れた部分を伸ばしたい時

- ・ 文章がわかりやすい、表現がリズミカル、ダンスのセンスがあるね、歌うまいね、など。
- ・ 一流だね。プロの域だね。(一番とは言えなくても。最高とは言えなくても)
- ・ 君は人を引っ張る力がある。リーダーとしての力がある。
- ・ 料理がうまそう、テニス上手そう、など。(しっかり実態はわからないけど、あなたの雰囲気から察するに、あなたの可能性についてこう評価していますよと伝える)
- ・ 君、買い物上手なんだね。(経済情報に精通している、交渉力がある、観察力が鋭い、といった様々な要素を含むので、実は内容の濃いほめ言葉)

成果を上げたい生徒にかけてあげたいほめ言葉

- ・ いいよ。いまのままでいいんだよ。きっと、いい結果が出るよ。
- ・ いいぞー。これをそのまま続ければいいんだ！続ければ、「ほんもの」になる！
- ・ 君のレポート（作文）、説得力あるね。
- ・ さっきの発表、迫力あったよ。心にズシンときたよ。
- ・ 君、～にかけては天下一品だね。
- ・ 君の～は最高だ！素晴らしい！
- ・ 君が一番光ってたよ。  
（生徒の行動や成果の細かい部分については言いにくい時、このように漠然とほめるのも一つの方法。私にはあなたが一番光って見えたという主観的な意見なので、誰も否定できない真実の言葉になる）
- ・ 君は伸びるぞー。うん、グングン伸びる！

ひとことで効果的に使いたいほめ言葉

（君の頑張り）は）すごいね！

- ・ いいぞ！
- ・ ステキ！（ステキと言われると誰しもうれしい気持ちになる）
- ・ さすが！（相手に対して高い評価を持っていたということを伝える時に効果的）
- ・ なるほど！
- ・ 素晴らしい！
- ・ 見事だ！
- ・ 最高！
- ・ こんなの初めて！（こういうことをしてくれたのは君が初めてだ）
- ・ 笑顔がいいね！（笑顔をほめることに遠慮の必要はありません）
- ・ 品がある。気品があるね。  
（身のこなしや動き、言葉遣いなどに）
- ・ 場が明るくなる。なにか空気が華やかになるね。
- ・ 颯爽（さっそう）としている。

（どのような状況で用いても、悪い意味でとらえられにくい表現）

- ・ 輝いている。  
（生徒が実力を発揮した状態だなと感じたらぜひ伝えたい表現）
- ・ 光っている。
- ・ ひときわ目立っているね。
- ・ ハツラツとしている。
- ・ メリハリの利いた声だね。
- ・ 姿勢がいいね。腰骨が立っている。心がまっすぐな証拠だ。  
（心の構えが体の姿勢に表れる。姿勢のよさは心のまっすぐさを表していることが多い）
- ・ さわやかだね。すがすがしい。
- ・ 筋がいい。  
（まだ十分に上達しているといえない段階の生徒に使える。人を決して傷つけないほめ言葉）

さりげなく能力の高さを評価したいとき

- ・ いいこと言うねえー。  
（生徒をほめているだけではなく、話や言葉をきちんと聴いているというメッセージが生徒に伝わります。これは生徒との信頼関係を築く第一歩と言えるでしょう。）
- ・ 理知的だね。うん、よく考えている。
- ・ 頭の回転が速いね。
- ・ 聡明だね。

期待と感謝の気持ちでほめるとき

- ・ 君に任せておけば安心だ。
- ・ 君は、君にしかないものを持ってるね。
- ・ 将来有望だ。
- ・ うちのエースだね。
- ・ 期待の星だ。
- ・ うちのクラスにいてくれてうれしい。  
（うれしいと言われて嬉しくならない人はいない）
- ・ ありがとう（場の雰囲気明るくする効果もある）

#### 4. ゆったり構える

人間性を磨き合う学級をつくるための第4の心がけは、「教師が、ゆったり構えて、日々の実践に打ち込む」ということである。

20代の頃、「どの子をも感動させる道徳授業」という論文を書いたことがある。

それを読んでくださったある大学の先生が、「担任としての君の気持ちはわかるが、そんなにあせらないでいいよ。力みすぎてる。なんもかんも自分ひとりでやろうとすると必ず無理が出てくるよ。クラスの全員を感動させるなんて、どいできっこないし、やろうとすればするほど他の問題が生じてくるよ」と言われ、気持ちだけが先走る私を戒めてくださったことがあった。

この指摘通り、私は、若い頃、熱心さゆえに、かえって何人かの子どもたちを潰してきたように思う。

25年間の現場経験を通して学んだ重要なことの一つに、

教育は、集団に対して完璧（100点満点）を求め、それを押し通そうとすると、それに倍する害が出てくる。

ということがある。

私は、自分の数々の失敗体験から、

教育は、集団に対しては8割主義で十分なのだ。

ということを強く学ばされた。

8割主義というのは、力をぬいていいかげんな教育をしていいということではない。

担任は自分なりに精一杯頑張るのであるが、学級全体に対しては、8割主義ぐらいで臨んだ方が、致命的な害を避けられるということである。

たとえば、不登校問題。

「なんとしてでも、私が担任の間に、登校させるのだ。そして、学力をつけさせ、必ずクラス全員で卒業し、高校に進学させるのだ」とあまりに力みすぎると、様々な問題が生じてくる。

熱血すぎると、教師にゆとりがないと、マイナス面が出てくる。

少しずつ登校しだしたが、まだまだという子がいたとする。

そういう子に対して、担任は、「よし、もっと頑張れ!」という気持ちになり、要求を高くしてしまうが、あまり性急に要求しない方がいい。

もっともっと登校させようとして、積極的にやって、結局全部ダメにしてしまったという事例がいくつもある。

積極的に働きかけて、最終的には、本人からも保護者からも恨まれてしまった、という悲しい事例がたくさんある。

決して無理をしないで、担任はその子に明るく接して、「登校できる日がほんの少しずつ増えているね。学校で笑顔も出るようになったね。ああ、よかった。よかった」と、そういう感じがいい。

それで十分である。

不登校になった理由は1つではない。必ずいくつかの理由が複雑に絡まっている。原因は複合的・多元的であるので、そう簡単に短期間で直線的に解決するということはない。

よって、担任教師が、全部自分が受けとめて、自分のクラスのなかで立ち直らせるようにしようと躍起になるのは、決していいことではない。

担任は、楽しいクラス・楽しい授業を心がけて、とにかく学校に少しでも来れるように、というふうにすれば、それだけでいい。

不登校の子に勉強をやらせて学力をつけさせなければなどというのは、ずいぶん先の話である。

とりあえず学校に出てきて、友だちと楽しくやっていたら、それで十分と思うこと。

「ひらがなが読めて、ある程度の漢字を書くことができ、計算機で計算ができれば、ああ、生きていけるよ。大丈夫さ。へっちゃらだよ。あせらなくていいよ！」

そう本人にも保護者にも言ってあげよう。

それを、何でもかんでも他の子たちと同じようにしてやらねばという教師の「善意」が、かえってその子のストレスを高め、より回復を困難にしてしまうということがある。

登校をいやがる子どもへの対応は、担任はあまり悩まないで、ゆったり構えていればいい。

毎日グスグスした感じで、子どもに対しても保護者に対しても、「学校に来い」というような強硬な要求はすべきではない。

「自分の担任時でダメだったら、次の先生で」というぐらいの感じでやった方がいい。

「クラス全員無欠席・無遅刻」なんて目指さなくていい。

8割主義で臨んでいるほうがいい。

その他、たとえば、整列や給食の問題。

一見して教室の中が整然としているクラスや、全校集会などでどこかの軍隊のようにビシッとしているというようなクラスでは、実は学校に行きたくないと思っている子がたくさんいる。

30人も40人もの中学生全員が一条乱れずビシッとしているということの方が、考えてみると異常である。

もちろん、全員が好き勝ってな行動をとっているという学級崩壊状態はいけませんが、一部はみ出した子がいるとか、そういったことがあって、ほんとうは普通なんだというぐらいに思った方がいい。

「クラスの8割の子がしっかり出来ている」

それは、スゴイことなのである。

ただ、確かに、そういったはみ出した子が出てくると、必ず担任が非難される。

他のクラスや学年に対して、良いアドバイス

ならいいのですが、そうではなく、ただ感情的に強烈に批判・非難するという人が、きまって現れる。

若い頃、私はそういう人から非難されるのが嫌で、「私のクラスからは1人のはみ出しも許さないぞ」と力づくで生徒を押しえつけていた。

しかし、その指導の結果、不登校やいじめの問題が生じてしまった。

はみ出した子のことで、何か言われれば、担任は何も言い返さず、弁解もせず、ただ非難されていればいい。

「私の力が足りないせいで」と言っておけばいい。

それができるようになると、担任教師として「ほんもの」である。

それを、自分の学級に関して、何か1つでも注意されるのがイヤだということで、「給食のエプロンは必ず着用しなさい」「牛乳は1本も残してはいけない。給食も無理にでも食べなさい」などと怒鳴りちらしたり、力で生徒をねじ伏せようとする。

その結果として、子どもは学校に行きたくなくなったとか、心が歪んでしまった、という事例がたくさんあることを忘れてはいけない。

「あなたの学級は、少し規則が守れていないね。完璧な統率をとれていないね」などの批判をあげないようにすることが、学級経営や生徒指導なのではない。

こと細かくギョアギョア怒鳴りちらしたり、力で生徒を押しえつけて、生徒に規則を守らせることが、学級経営や生徒指導なのではない。

人を伸ばすことが学級経営であり、生徒指導である。

大きな勘違いをしないことである。

あなたの学級のなかに、はみ出す子がいてもいい。

中学校では、当たり前のこと。自然なこと。

「自分は担任として、自分のクラスの生徒一人

残らずビシッとさせなければならない」などと考え、「はみ出す子がいるから」と、自分を追い込む必要はない。

80パーセントの子ができていれば、それは素晴らしいことである。

それで、十分なのである。

ゆったり構えるべきである。

なんもかんも100パーセント、自分でなんとかしなくてはいけないなど考える必要はない。

また、成果を性急に求めないように。

何にでも期待しすぎないように。

いまの日本は、すべてのことにせっかちになりすぎている。

ゆったり構えて、生徒に接していくことを再度、重視したい。

#### 【参考文献・引用文献】

- 東井義雄『子どもを見る目 活かす知恵』, 明治図書出版, 1986.
- 片岡徳雄編著『個を生かす学級づくり一問一答』, 黎明書房, 1978.
- 向山洋一『学級づくり 個への対応QA事典』, 明治図書出版, 2000.
- 大村はま『教えるということ』, 共文社, 1972.
- 兎島邦宏『教師のパフォーマンス』, ぎょうせい, 1991.
- 本間正人・祐川京子『ほめ言葉ハンドブック』, PHP研究所, 2007.